

〈司書合格体験記〉

合格体験記

文学部文化学科 中 尾 真 麻

私は小学生の頃から「図書館司書か教師になりたい」という思いを持っていたので、教員免許・司書資格・司書教諭資格を取ることができる同志社大学を選びました。そして大学へ入りいろいろなことを学ぶ中で、司書の仕事に強く魅かれ、教師としてではなく司書として働いていきたいと思うようになりました。昔からこどもが好きだったので、公共図書館や学校図書館へ就職し、児童を対象にした図書館サービスを行いたいと思うようになりました。

私が司書試験に向けて行ったことは以下のとおりです。

- 2 回生…まず司書になるための手段を調べる。
公共図書館へ就職するには公務員試験を受ける必要があると知る。
- 3 回生…公務員試験（1次試験 教養試験）のためのテキストを買う。
テキストを使って、少しずつ独学で勉強をする。
秋頃から、司書を目指す人が集まっていた勉強会に参加する。
- 4 回生…経験を積むために公共図書館でアルバイトを始める。
大学の近くにある小学校で図書室ボランティアをする。
図書館に関する講演会や大会に参加する。

私の場合、試験（教養試験）のための勉強は独学でした。公務員試験の教養試験では数学・国語・理科・社会・英語などの幅広い分野の問題が出題されます。その中でも出題数が多いのが数学です。数学が大の苦手だった私にとっては、それを独学で勉強するのは大変でした。解説を見ても理解できないものがたくさんあったので、その時は理系の友達に教えてもらいました。独学・予備校・通信教育など、勉強する手段はいくつかありますので、自分にあったものをそれぞれ選べばいいと思います。

司書試験には、2次試験で専門試験（図書館学）を課すところもあります。私は自分だけで勉強するのは大変だと思い、3回生の秋頃から司書を目指す人が有志で集まっていた勉強会に参加することにしました。勉強会には、先輩方が残してくださった試験情報や専門試験の過去問題がたくさんあったので、それを大いに使わせていただきました。勉強会のメンバーで過去問題をもとにレジュメを作成・発表をして試験対策をしたり、ともに励ましあったりしました。私は勉強会という場に本当に支えられたと思います。

4回生になってからは、ほんの少しですが一般企業の就職活動もしてみました。面接に慣れる良い練習になったと思います。5月からは司書試験を本格的に受けていきました。私が4回生になってから受けた司書試験は、以下の通りです。

- ・5月…国立大学法人→1次試験（筆記）で不合格
- ・9月…東近江市→1次試験（筆記）で不合格
京都府学校司書→最終面接で不合格

- ・ 1月…大阪市（嘱託）→最終面接で不合格
箕面市学校司書（任期付職員）→最終合格 内定
- ・ 2月…西宮市（嘱託）→2次試験（面接）辞退
滋賀県→2次試験（面接）辞退

京都府学校司書だけ、奇跡的に最終面接まですすむことができました。しかし、残念ながら最終面接で落ちてしまいました。不合格者は後日、自分の順位を教えてもらうことができたので聞きにいったところ、合格者3名に対して私は4位で落ちたと知りました。あと一人というところで不合格になったと知り、落ち込みました。しかし、ここであきらめてはいけないと思い1月以降に募集が出ていた嘱託試験をいくつか受けることにしました。嘱託としてでもいいから、まずは図書館で働き、そこで経験を積みながら正規職員の司書試験を受け続けようと思ったからです。結果としては、2月末に箕面市学校司書の試験に最終合格し内定をいただくことができました。しかし正規職員としてではなく、三年任期付の職員としての採用です。まだ働き始めたところなので詳しくはわかりませんが、任期が終わったとしても契約更新の可能性があるところだそうです。今のところ学校司書の仕事にとっても魅力とやりがいを感じ、しんどいながらも楽しい毎日過ごしています。正規職員ではありませんが、しかし仕事内容としてはまさしく、私が望んでいたように児童を対象にした図書館サービスを行うことができる所です。これから正規職員の試験を受け続けていくかはまだ決めていませんが、とりあえず三年間は今の職場で経験を積もうと思っています。

司書試験は募集自体が少なく、たとえ募集があったとしても採用人数が少ないので試験を受けるのは本当に大変です。私も途中で何度もくじけそうになりました。でも最後まで諦めずに試験を受け続けると、私のように卒業間際に就職先が決まることもあります。だから、みなさんも本当に司書になりたいと思った場合は、最後まで諦めずに頑張ってください。応援しています。

文学部文化学科 前田 笑

司書になりたいと思い同志社大学に入学して四年、ありがたいことに無事合格をいただき、この四月から東近江市立八日市図書館で司書として働くこととなりました。ここでは、司書を志望したいというかたがたのために、わたしが司書になるためにしてきたことをお話させていただこうと思います。

○司書になるための勉強

司書といってもさまざまですが、ここでは公立図書館の正職員の司書になるためには、という前提で説明します。

公立図書館の正職員は、いろいろなかたちで委託をされているところでなければ、基本的にはその図書館を設立・運営している自治体が、その自治体の職員の司書職というかたちで採用します。とはいっても、そのような制度を取っていないおかつ新規採用のある自治体はとも少なく、一般職で採用した職員が図書館にもまわってくるだとか、嘱託職員を採用するということが多くなっています。

その数少ない「司書を正職員で採用する自治体」の採用試験には、勿論全国か

ら多くの受験者がつめかけます。「1名程度」だとか「若干名」の採用枠に対し、数十人から200人以上もの受験者がいることも少なくありません(わたしがこれまでに見聞したなかで一番倍率が高かったのは、400倍以上というものでした)。絶対に正職員の司書として公立図書館で働きたいのなら、そこで勝ち抜いていかなければならないわけです。

試験のかたちは自治体によってさまざまですが、大きくは

1. 一次試験で教養試験のみ→二次試験以降で専門試験と面接というパターン
2. 一次試験で教養試験と専門試験→二次試験以降で面接というふたつのパターンに分かれるように思います。

教養試験というのは、いわゆる公務員試験の「一般教養」分野の試験です。具体的には社会科学、人文科学、自然科学、文章理解、数的処理、判断推理、資料解釈という分野のものがあります。これらは、市販の公務員試験対策のテキストや通信教育、予備校、学内で開講されている公務員講座(内容は予備校のものと同じだそうです)などで学ぶことができます。

わたしは実務教育出版の通信教育を利用しました。利点としては必要な分野のテキストを一度に揃えられること、大学生協書籍部で気軽に申し込めること、『受験ジャーナル』誌上模試などを無料で受験できることなどがあります。ただし、通信教育とは言っても基本的に自学自習なので、勉強は教えてもらいたいという人にとっては大変かも知れません。教養試験対策については、公務員志望の友人などにアドバイスを求めるのも手かと思えます。

専門試験は多くの自治体が図書館学の試験を課しますが、たまに一般職と同じ試験(行政学、経済原論など)を課すところもあります(例：2006年大阪府富田林市)。

図書館学の試験については、基本的には司書資格課程で履修する各分野から出題されます。ですが、一度講義を受けただけで完璧になれるものでもありませんし、出題傾向もありますので、過去問を研究して自分で勉強することが大事です。過去問は殆どの自治体で公開されていないと思いますが、受験者が再現問題を作成してインターネットで公開していたりします。

この点において、同志社生はかなり有利であるといえます。何故ならば、過去10年以上にわたって、代々の卒業生たちが蓄積してきた再現問題のファイルがあり、それを勉強会という場で解いていたり、深く研究したりすることができるからです。わたし自身、3・4回生の二年間に勉強会でたくさんこのことを学ばせてもらいました。単に図書館学の勉強をするというだけではなく、何故自分が司書になりたいのかということを考える場でもあり、司書になりたいという思いを深める場でもあったと思います。

○司書になる人になるために

採用試験を勝ち抜くためには、ただ勉強しているだけでなく、自分の中の司書としての素質を涵養する必要があるかと思えます。司書としての素質を涵養するというのは、面接でアピールできるところをつくるのと同時に、実際に働き出してから自分がどういう司書でありたいか、という基本をつくることです。

そのためにはまず今まで以上に図書館を好きになること、図書館を利用すること、図書館を見ることが必要です。たとえば、自分がよく使う図書館が何に力を入れているか、何が欠けているか、職員の意識はどうだろうか、職員構成はどうなっているのだろうか……ということを考えながら利用する。旅行へ行く際にも、

事前にその土地にはどこに図書館があるかを調べておいて、時間が空けば寄ってみる（はじめから図書館めぐりを主たる目的として旅行をする方もいらっしゃるようですが）。図書館学や図書館に関する書籍、雑誌も、少しずつでも読むようにする。図書館員が個人で開設しているサイトやブログなどもよく読む。司書課程の講義を担当されている先生に質問などをして、講義以上のことを教えていただく。できれば、アルバイトなどのかたちで実際に図書館で働く。

また、図書館の世界のなかだけではなく、それをとりまく出版界、書店業界の事情も知るようにします。図書館資料である本について知ることも勿論必要です。

そうやって、自然と図書館界を館単位、人単位から館界全体、ひいては館界の外まで知悉しておくべきだと感じています。わたしが実際にそれをできているかというと、全く自信はありません。ただ、そうする努力は必要だし、そう努力できる人間が司書に向いているのではないかと思うのです。

わたしの場合、3・4回生の二年間は公立図書館と大学生協の書籍部でアルバイトをし、4回生の一年間は公立小学校の図書室（学校図書館）でボランティアをしていました。これらの経験が面接で活かされたことは言を俟ちませんし、これから働いてゆくうえでもきっと役に立つだろうと思います。

公務員数の削減、図書館費の削減、委託など、司書として就職したいという人にとっては厳しい状況が続いています。それらを乗り越えるだけの資質をもって司書となる同志社生が多くあることを、望んでやみません。